

被服選択における色嗜好と性格特性の関連

中村 信次

日本福祉大学教育・心理学部

Relationship between Color Preference and Personality Trait in Selecting Clothing

Shinji NAKAMURA

Faculty of Education and Psychology, Nihon Fukushi University

Keywords：抽象的色嗜好，具体的色嗜好，被服選択，性格特性

要旨

色嗜好が被服選択行動に及ぼす影響における性格特性の媒介効果を検討した。調査においては、「好きな色（嗜好色）」「好きな服の色（被服嗜好色）」「よく着る服の色（着装色）」「嫌いな色（嫌忌色）」「嫌いな服の色（被服嫌忌色）」「1番着ない服の色（非着装色）」を、9種の色カテゴリー（赤，オレンジ，黄，黄緑，緑，青，紫，ピンク，茶）からそれぞれ1色ずつ選択させ、選択色のイメージを、15種の形容詞対を用いたSD法により回答させた。さらに、回答者の性格特性を日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) を用いて測定した。SD法による色イメージの測定結果に対する因子分析により、「活動性」「柔軟性」「澄明性」の3因子を抽出し、その結果に基づき各選択色間の3次元空間上での距離を算出した。分析の結果、嗜好色と被服嗜好色・着装色が一致する回答者は、両者が不一致であった回答者に比べ、有意に神経症傾向が低いことが示された。この結果は、他者の目を気にする傾向が高い者は、他者からの評価懸念が高くなり、自身の嗜好色に基づく被服選択が困難であったことを示唆するものである。また、勤勉性が高い者ほど、被服嗜好色と着装色のイメージ距離が近くなり、開放性の高い者ほど、嗜好色と着装色のイメージ距離が近くなることなどが示され、色嗜好に基づく被服選択の際に、回答者の性格特性が一定の関与をなすことを示唆する結果が得られた。

Abstract

The current investigation examined the effects of abstract color preference and personality traits on clothing choice behavior. In the questionnaire survey, participants were asked to select one color from each of nine color candidates (red, orange, yellow, yellow-green, green, blue, purple, pink, and brown) for "prefer color," "clothing prefer color," "wearing color," "hate color," "clothing hate color," and "non-wearing color." They were also asked to answer the image of the selected color using semantic differential method with 15 adjective pairs. The participants' personality characteristics were measured using the Japanese version of the Ten Item Personality Inventory (TIPI-J), and a factor analysis applied for the results of SD method extracted three factors: "activity," "flexibility," and "clarity," and the 3D distance between each selected color was calculated based on the results. The participants whose "prefer color" matched their "clothing prefer color" and "wearing color" indicated significantly lower neuroticism. This result suggests that those

with higher neuroticism tendency were more concerned about evaluation from others and had difficulty in selecting clothing based on their own color preferences. Moreover, the higher the openness, the closer the distance between the image of "prefer color" and "wearing color," and the higher the conscientiousness, the closer the distance between the image of "clothing prefer color" and "wearing color," suggesting a certain involvement of the participants' personality traits in clothing color selection.

1.はじめに

日常生活場面において、友人や家族と、「私はこの色が好きだ」とか、「あの人はこの色が好きだから…」などの会話がなされることは少なくない。我々は、多くの場合、各個人に固有の好きな色、嫌いな色を有しており、比較的容易にそれらを思い浮かべ、言葉にして表すことができる。この色の“好み”のことを、色嗜好 (color preference) と呼ぶ。色嗜好は色彩科学の大きな研究対象であり、多くの研究者が多様な方法を用いてこの問題にアプローチしている (日本色彩学会, 1998)。例えば植物などの場合、その色彩は個体の成熟状況を示す指標となり、可食か否かの判断の材料ともなり得ることから、自然物の色彩に対する嗜好・嫌悪には一定の生態学的な根拠がある。しかしながら、被服や雑貨、家電などの身の回りにある工業製品・人工物の彩色に関しては、製造者が恣意的に決定したものにとすぎず、なぜ我々がそれらの対象に対しても比較的安定した嗜好・嫌悪傾向を持つのかに関しては、環境適応の側面から考えて、生態学的な基盤は存在しないはずである。なぜ我々は個々人に固有の色嗜好を持つのか。そもそも、色彩そのものは、大きさや長さ、形などと同じく、対象物の持つ視覚的屬性の一つにとすぎず、照明光などによる空間に満ちた色の場合を除き、個別の対象を離れては生体にとって特別の意味を持ちえないはずである。色嗜好の背後に存在する心理学的なメカニズムを考えることには、個々人の個性である嗜好の問題を超えた深い意義がある (例えば Palmer & Schloss, 2010)。

これまで行われてきた色嗜好に関する心理学的研究の多くにおいては、彩色された具体的な事物を提示、もしくは想起させることなく、色そのものに対する嗜好・嫌悪の度合い (抽象的色嗜好) を尋ねるという手法が用いられてきた。しかしながら、実際にわれわれが目にするのは何らかの事物に彩色された色であり、抽象的な色情報のみが存在するわけではない。日常生活においては、評価の対象となる事物が異なれば色嗜好判断も異なるものとなることは頻繁に発生する。多くの人が、商品購入

の際の選択の重要な要因の一つとして商品の色を挙げることから、上記のことはむしろ当然の事案であると考えられる (“赤” が好きな人が身の回りの品をすべて “赤” で統一しているわけではない)。抽象的な色そのものへの嗜好判断は果たして何を意味しているのであろうか? 具体的事物を指定して、それに対する色の好みを尋ねた調査も存在するが (例えば, Saito, 1983; Holmes & Buchanan, 1984; 三浦・齋藤, 2004; 中村ら, 2008), 抽象的・全般的な色嗜好との関連は依然明らかではない。

以上の認識に鑑み、中村ら (2011) は、具体的事物を想定した際の色嗜好判断 (具体的色嗜好) と、色そのものへの嗜好判断 (抽象的色嗜好) との関係を調べることを目的とする質問紙調査を実施し、色に対する認知的態度が両者の関係を如何に媒介するのかを検討した。その結果、いわゆる「定番色」というものがなくカラーバリエーションが豊富な商品であり、比較的買い替え頻度の高いもの (ハンカチ, 携帯電話等) に関しては、抽象的嗜好色と具体的嗜好色が一致する傾向が高いが、逆の特性を持つもの (定番色が定まっており、買い替え頻度が低いもの; 家庭用電化製品等) に関しては両者の一致度が低くなること等を見出した。

本研究では、抽象的色嗜好と具体的色嗜好との間の関連性についてさらなる検討を加えるために、カラーバリエーションが豊富であり、商品購買決定における色彩の重要性は高いものの、その選択に関しては一定の場面制約性があると考えられる「被服」を題材として取り上げることとする。松田ら (2019) は、着装希望色 (「着たい色」) のイメージと、回答者自身のパーソナリティイメージ (例えば、「私はあたたかく、しずかで、地味な人間である」といった、自己の性格に関する認識) の間に有意な相関が存在することを明らかにしており、被服選択における色嗜好の影響に、性格特性や色に対するイメージ (色イメージ) が媒介的效果を示す可能性が示唆される。そこで、本研究においては、抽象的色嗜好と (被服に対する) 具体的色嗜好の関係に、回答者の性格

特性と色イメージがどのような影響を及ぼすのかに関し検討を加える。

2. 方法

(1) 調査参加者

大学生103名（男性56名、女性47名、平均年齢19.2歳）が調査に参加した。

(2) 調査項目

調査参加者は、「好きな色（嗜好色）」、「好きな服の色（被服嗜好色）」、「よく着る服の色（着装色）」、「嫌いな色（嫌忌色）」、「嫌いな服の色（被服嫌忌色）」、「1番着ない服の色（非着装色）」を、赤、オレンジ、黄、黄緑、緑、青、紫、ピンク、茶の9種の選択肢から一色の色名を選択することにより回答を行った^{註1}。また、それぞれの回答色に対する印象を、「明るい-暗い」「陽気-陰気」などの15種の形容詞対を用いたSD法により計測した（7件法）。さらに、日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J; 小塩ら, 2012) を用いて、回答者の性格特性に関する質問を行った（TIPI-Jは、Big Five理論に基づく尺度であり、回答者の性格特性を、外向性、親和性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5因子構造を用いて計測するものである〔10項目、7件法〕。調査参加者の疲労を可能な限り軽減するために、比較的少数の質問項目で構成されており、かつ、参加者の性格の全般的特性を計測可能な尺度として、TIPI-Jを今回の調査において採用した）。

(3) 手続き

調査は心理学に関する講義を用いて、集団形式で行われた。回答者は、自身のペースで、質問項目が記載された質問紙に回答を行った。すべての回答の終了に、約10分を要した。

(4) 倫理的配慮

調査への参加を求めるのに先立ち、調査概要の説明のうち、1) 調査は匿名で行われること、2) 調査結果は統計的に処理され、個人のデータが公になることは一切ないこと、3) 調査参加への不同意、調査の途中離脱により不利益を被ることは一切ないことを調査参加者に説明し、参加に同意した者のみを調査参加者とした。

3. 結果と考察

(1) 嗜好色、嫌忌色の分布

図1～3に、回答者全体、男性回答者、女性回答者の嗜好色（嗜好色、被服装嗜好色、着装色）・嫌忌色（嫌忌色、被服嫌忌色、非着装色）の選択比率を示す。嗜好色、被服装嗜好色、着装色として青を選択する回答者が多く、その傾向は男性回答者においてより顕著である。また、茶は、嗜好色として選択される比率はごく低いが、男性回答者においても女性回答者においても、被服装嗜好色、着装色として一定程度選択されている。嫌忌色に関しては、男女とも、ピンクを忌避色として選ぶ傾向が高く、被服嫌忌色、非着装色としての選択比率も高い。

嗜好色・嫌忌色の男女間の選択比率の違いを検討するために、6種の嗜好色・嫌忌色ごとに2要因 χ^2 検定を実施した（性別2×色カテゴリー9）。着装色において、男女間の有意な色選択比率の差異が確認された（ $\chi^2(8)=22.05, p=.002$ ）。残差分析の結果、男性は着装色として青を選択する比率が女性より高く、女性は茶を選択する比率が男性よりも高いことが示された。その他の嗜好色・嫌忌色において、色カテゴリーの有意な選択比率の差異は認められなかった。

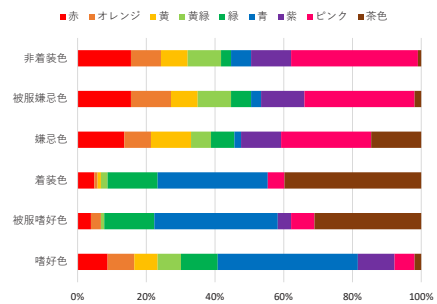


図1 嗜好色・嫌忌色の選択比率（全体）

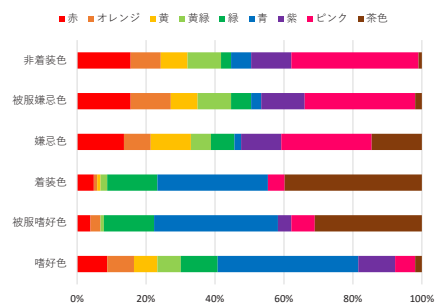


図2 嗜好色・嫌忌色の選択比率（男性）

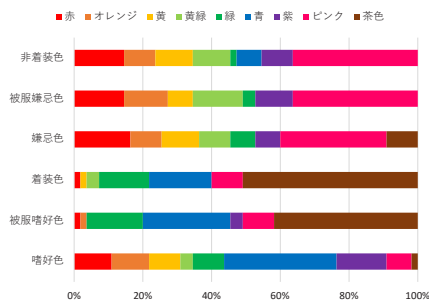


図3 嗜好色・嫌忌色の選択比率（女性）

表1 選択色の一致・不一致人数

	一致	不一致
嗜好色－被服嗜好色	33	70
嗜好色－着装色	27	76
被服嗜好色－着装色	73	30
嫌忌色－被服嫌忌色	61	42
嫌忌色－非着装色	44	59
被服嫌忌色－非着装色	44	59

(2) 嗜好色，嫌忌色の一一致率

本節および次節では、嗜好色（嗜好色，被服嗜好色，着装色）間，および，嫌忌色（嫌忌色，被服嫌忌色，非着装色）間の一一致・不一致と回答者の性格特性の間の関連性の分析について記述する。表1に，嗜好色，嫌忌色として選択された色が一致した回答者と不一致であった回答者の人数を示す。嗜好色と被服嗜好色および着装色が一致する回答者は比較的少ない（25～30%程度）。一方，被服嗜好色と着装色とが一致する回答者は全体の7割を超える。1要因 χ^2 検定および残差分析により，着装色と被服嗜好色の一一致率が，嗜好色－被服嗜好色，嗜好色－着装色の一一致率よりも有意に高いことが示されている（ $\chi^2(2) = 28.21, p < .001$ ）。このことは，抽象的色嗜好（色概念そのものに対する嗜好の度合い）と具体的色嗜好（彩色対象が限定・明示された場合の色嗜好の度合い；今回の場合は自身が着装する被服に対する色嗜好）が必ずしも一致しないこと，異なる様式で尋ねられた具体的色嗜好（着装色 [よく着る服の色] と被服嗜好色 [好きな服の色]）が比較的良好に一致することを示す。また，嫌忌色における一致率は，嫌忌色と被服嫌忌色，非着装色の間で4割程度，被服嫌忌色と非着装色の間で約6割と，嗜好色の場合と比較して，一致率の差異は減少するものの，依然有意な一致率の差異が認められる（ $\chi^2(2) = 4.89, p = .027$ ）。上記の抽象的色嗜好と具体的色嗜好との間の関係性に関する考察が，嫌忌色の場合にも適用可能であることがうかがえる。

(3) 嗜好色，嫌忌色の一一致・不一致と性格特性との関連

次に，嗜好色間，嫌忌色間の一一致・不一致と，回答者の性格特性の差異との関連について検討する。回答者を，嗜好色間，嫌忌色間の一一致・不一致により群分けし，群間にTIPI-J得点（5種）の有意な差異があるか

否かを対応のないt検定を用いて分析した。図4～6に，嗜好色間の一一致・不一致による性格得点の変化を示す。嗜好色が被服嗜好色と不一致の群は一致している群と比較して，同様に嗜好色が着装色と不一致の群は一致する群と比較して，神経症傾向得点が高くなるという有意傾向もしくは有意差が示された（それぞれ， $t(101) = 1.61, p = .054, t(101) = 1.78, p = .039$ ）。この結果は，神経症傾向が高い回答者は，他者からの評価懸念も高く，本来自分の好きな色（嗜好色）であっても，自身の被服としてその色を好み（被服嗜好色），その色の被服を実際に着装する（着装色）程度（もしくは，好きな被服の色やよく着る服の色として他者に表明することのできる程度）が，神経症傾向の低い回答者に比べて，低くなることを示唆するものである。また，着装色と被服嗜好色の一一致・不一致に関しては，一致群において勤勉性が高くなるという有意傾向が認められた（ $t(101) = 1.57, p = .060$ ）。「まじめな」回答者ほど，服として好ましい色の被服を実際に着装する傾向が高いことが理解できる（ただし，勤勉性の高さゆえ，回答の一貫性を保持するために，服としての好みの色 [被服嗜好色] と実際によく着ると回答した色 [着装色] を一致させるという回答バイアスが働いた可能性も考慮しなければならない）。

一方，嫌忌色間（嫌忌色，被服嫌忌色，非着装色）の一一致・不一致による分析では，性格得点に有意な差異は生じなかった。抽象的色嗜好（嗜好色）と具体的色嗜好（被服嗜好色・着装色）との関連に比し，抽象的嫌忌色（嫌忌色）と具体的嫌忌色（被服嫌忌色・非着装色）との関連の場合においては，回答者の性格特性の果たす役割がより少ないものと推察される。

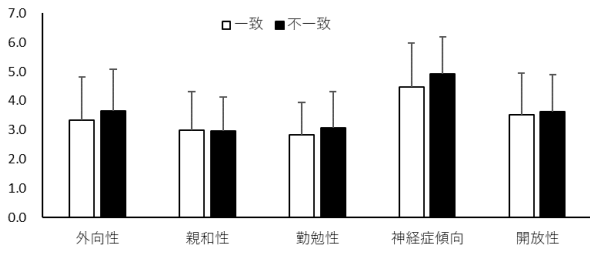


図4 嗜好色・被服嗜好色的一致群と不一致群のTIPI-J得点の比較

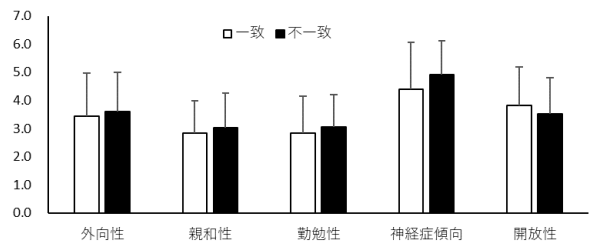


図5 嗜好色・着装色的一致群と不一致群のTIPI-J得点の比較

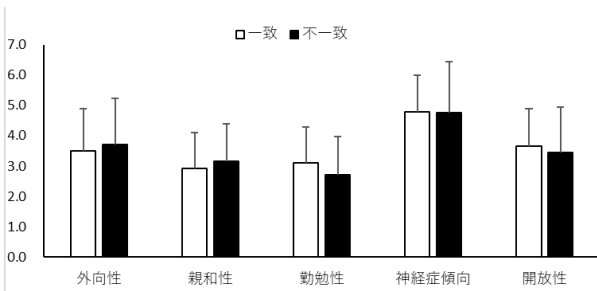


図6 被服嗜好色・着装色的一致群と不一致群のTIPI-J得点の比較

(4) 嗜好色・嫌忌色の色イメージ

本節以降においては、嗜好色・嫌忌色として選択された色の印象（色イメージ）、および、嗜好色間・嫌忌色間の色イメージの差異が回答者の性格特性によりどのように変化するのかを検討する。嗜好色（嗜好色、被服嗜好色、着装色）と嫌忌色（嫌忌色、被服嫌忌色、非着装色）の色イメージを計測するために実施された15種の形容詞対を用いたSD法による印象測定の結果に対し、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を適用し、活動性（「情熱的—理知的」、「動的—静的」など）、柔軟性（「柔らかい—かたい」、「女性的—男性的」など）、澄明性（「きれい—汚い」、「澄んだ—濁った」、など）の3因子を抽出した。各因子に含まれる項目粗点の平均を算出し、評価得点とした。

図7および図8に、嗜好色（嗜好色、被服嗜好色、着装色）と嫌忌色（嫌忌色、被服嫌忌色、非着装色）の評価得点をそれぞれ示す。SD法における評価の中央点

(4, 「どちらでもない」)を基準に、ボンフェローニ補正を伴う1標本のt検定を行ったところ（最低有意水準5%, 自由度102）、以下に示す通り、評価得点において多様な有意性を確認することができた。嗜好色においては澄明性が高く ($t=12.68$)、被服嗜好色、着装色においては活動性が低く ($t=-5.01, -5.08$)、柔軟性 ($t=2.93, 3.89$)、澄明性が高い ($t=4.32, 2.93$)。また、嫌忌色においては活動性が高く ($t=6.22$)、柔軟性が低い ($t=-4.95$)。さらに、被服嫌忌色、非着装色においては、活動性 ($t=8.61, 7.55$)、澄明性が高く ($t=4.84, 6.35$)、柔軟性が低い ($t=-7.34, -7.46$)。特に、嫌忌色、被服嫌忌色、非着装色に対する柔軟性の評価の低さは顕著であり、柔軟なイメージを与えない色が、抽象的な嗜好の観点においても、(被服に関する)具体的な嗜好の観点においても、好まれないものであることを強く示唆している。また、評価中央点からの乖離は、抽象的な嗜好(嗜好色、嫌忌色)よりも、具体的な嗜好(被服嗜好色、着装色、被服嫌忌色、非着装色)においてより大きなものとなっており、具体的な嗜好において選択色のイメージの効果がより大きくなる可能性を示唆する。

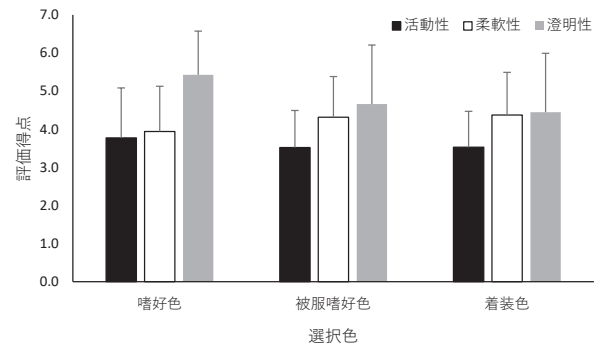


図7 嗜好色の色イメージ得点

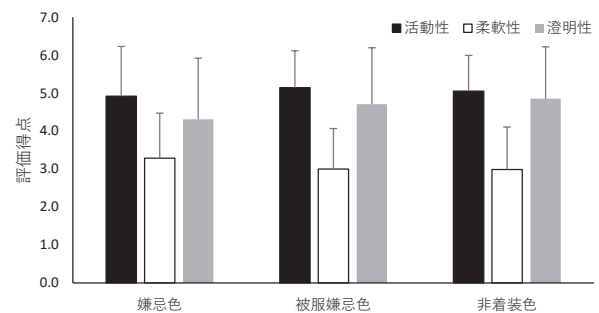


図8 嫌忌色の色イメージ得点

(5) 嗜好色・嫌忌色の色イメージと性格特性との関連

嗜好色（嗜好色，被服嗜好色，着装色）および嫌忌色（嫌忌色，被服嫌忌色，非着装色）の色イメージ評価得点（活動性，柔軟性，澄明性）と，回答者の性格得点（外向性，親和性，勤勉性，神経症傾向，開放性）との積率相関係数を算出したところ，嗜好色・嫌忌色の活動性においてのみ，有意な相関が認められた（表2）．嗜好色の活動性評価は，外向性・勤勉性と有意な正の相関を有しており，外向性・勤勉性の高い回答者（すなわち，「まじめで活動的な」者）が，抽象的な嗜好として活動性の高い色を好む傾向を持つことが示されている．また，嫌忌色の活動性は外向性と開放性に対して，被服嫌忌色の活動性は勤勉性と開放性に対して，有意な負の相関を示す．「活動的で好奇心に富む」者は，活動的なイメージを持つ色を嫌う傾向が低く，さらに「まじめで好奇心に富む」者は活動性の高い色イメージを持つ被服を嫌う傾向が低い．性格特性と色嗜好との関連として，整合的に理解可能な結果であると思われる．勤勉性の高い者が活動性の高い色を好み，活動性の低い色の被服を嫌う傾向に関しては，今回の調査の参加者が大学生であったことに注意をしなければならない．状況に応じた被服選択を強く求められる社会人を対象として同様の調査を行った場合には，異なる傾向を持つ結果が得られる可能性は容易に想定される．引き続き検討を要すべき事項である．いずれにせよ，嗜好色・嫌忌色の色イメージ

と回答者の性格特性との関連を調べた研究は多くなく，外向性，神経症傾向，勤勉性が何らかの効果を持ち得ることを示した今回の結果は，今後のさらなる検討に際し有益なものとなるであろう．

(6) 嗜好色・嫌忌色間の色イメージの差異と性格特性との関連

次に，嗜好色間・嫌忌色間の色イメージの類似性・相違性を検討するために，各選択色の3種の評価得点（活動性，柔軟性，澄明性）に基づき，任意の2つの選択色間の3次元空間距離を算出した（色イメージ距離と呼ぶ）．回答者の性格特性が，嗜好色・嫌忌色の色イメージ距離にどのような影響を及ぼすのかを検討するために，色イメージ距離と性格特性との積率相関係数を算出した（表3）．被服嗜好色と着装色との色イメージ距離と勤勉性の間に，また，嗜好色と着装色とのイメージ距離と開放性の間に，いずれも弱いながらも有意な負の相関が認められた．すなわち，勤勉性の高い回答者においては，被服として好ましい色と，普段の生活においてよく着装する色との間のイメージ間距離が近く，両者の印象が似通ったものとなる．勤勉性の高いものはセルフコントロールの能力が高く，計画性をもって行動する傾向が高い．自身の被服に対する具体的な嗜好に伴う被服選択・購買を日常的に行ってきた結果，着装色と被服嗜好色の色イメージが類似したものとなった可能性

表2 嗜好色・嫌忌色の色イメージと活動性得点との相関

	嗜好色	被服嗜好色	着装色	嫌忌色	被服嫌忌色	非着装色
外向性	0.270**	0.173	0.168	-0.203*	-0.089	-0.096
親和性	-0.144	0.023	-0.018	-0.044	-0.179	-0.139
勤勉性	0.236*	0.028	0.159	-0.120	-0.232*	-0.148
神経質傾向	-0.168	-0.002	-0.062	0.168	0.150	0.050
開放性	0.091	0.081	0.056	-0.259**	-0.210*	-0.190

* $p < .05$, ** $p < .01$

表3 色イメージ距離と性格得点との間の相関

	嗜好色-被服嗜好色	被服嗜好色-着装色	嗜好色-着装色	嫌忌色-被服嫌忌色	被服嫌忌色-非着装色	嫌忌色-非着装色
外向性	0.14	0.02	0.03	0.02	0.14	0.08
親和性	0.00	0.08	0.04	-0.18	0.00	-0.10
勤勉性	-0.04	-0.23*	-0.05	0.07	0.14	0.15
神経質傾向	0.11	0.08	0.17	-0.02	-0.07	-0.03
開放性	0.01	-0.10	-0.21*	0.08	0.06	0.04

* $p < .05$

が考えられる。同様に、開放性の高い回答者は、嗜好色と着装色の印象が似たものとなる傾向が存在する。好奇心に富み、新しい経験に対して開放的である者は、(前に述べた神経症傾向の高い者が他者からの評価を懸念して好きな色を被服として選択しない傾向を持つこととは対照的に)、自身の好きな色と類似したイメージを持つ被服を果敢に選択している傾向を読み取ることができる。

一方、嫌忌色間の色イメージ距離は、性格得点と有意な相関を示すことはなかった。

4. まとめ

本研究では、被服を題材とし、抽象的嗜好と具体的嗜好の関連性に、性格特性がいかに媒介効果を持ちうるのかを検討した。質問紙調査の結果、嗜好色と被服嗜好色・着装色が一致する者において有意に神経症傾向が低くなること、勤勉性の高い者ほど、被服嗜好色と着装色の色イメージが類似する傾向が高く、同様に開放性が高い者ほど、嗜好色と着装色のイメージが似通っていることなどが示された。これらの結果は、嗜好に基づく被服選択の際に、回答者の性格特性が一定の関与をなすことを示唆するものである。抽象的嗜好と具体的嗜好の関係に関しては、その検討が体系的になされている状況とは言えない。一般的には、抽象的嗜好が対象者固有の特性として比較的安定的に存在し、それに対し様々な状況要因が付加されることにより、適用対象に固有の種々の具体的嗜好が生じると想定される。本研究は、具体的嗜好と抽象的嗜好の関係性を検討する際に、回答者の性格特性や嗜好色・嫌忌色の色イメージを媒介変数として想定することの有用性を示すものであるといえる。

一方、本研究によって示された色イメージ距離と性格特性との間の相関は、いずれも有意とはいえかなり弱いものにとどまっていた。このことに関して、性格特性が有する媒介効果が弱いものであった可能性とともに、本研究において用いられた嗜好色・嫌忌色の測定手法に起因する可能性も考慮しなければならない。本研究においては、候補として挙げられた9種の色カテゴリーを色名として提示し、それらの中から嗜好色・嫌忌色を一色のみ選ばせた。色名提示された色概念に対して回答者が想起する個別具体的な色は、かなり広範な広がりを持ったものとなり(例えば、赤の色名が提示された場合に、鮮やかな赤やくすんだ赤、明るい赤や暗い赤のいずれを

想起するのかは、今回の調査では統制されていない)、それに随伴して選択色の色イメージも焦点化されていないものとなっていたはずである。今後は、実際の被服の色彩や色票など、直接的な色情報提示の方法なども用いながら、検討を進める必要がある。

引用文献

- Berlin B., Kay, P. 1969 BASIC COLOR TERMS Their universality and evolution, University of California Press.
- Holmes C. B., Buchanan J. B. 1984 Color preference as a function of the object described. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 22, 423-425.
- 松田博子, 名取和幸, 破田野智美 2019 色の好みとパーソナリティとの関係—色の感情的意味からの考察, *日本色彩学会誌*, 43, 69-80.
- 中村信次, 原田妙子, 城川哲也 2008 近赤外線分光法を用いた嗜好判断中の皮質活動分析—色情報提示様式の効果—, *日本色彩学会誌*, 32, 185-194.
- 中村信次, 高橋晋也, 羽成隆司 2011 具体的事物に対する嗜好表出—抽象的嗜好と具体的嗜好の関係—, *日本福祉大学子ども発達学論集*, 3, 81-89.
- 日本色彩学会 1998 新編色彩科学ハンドブック [第2版], 東京大学出版会, 670-675.
- 三浦久美子, 齋藤美穂 2004 <身につける色>と<周辺の色>の嗜好比較, *日本色彩学会誌*, 28, 163-175.
- 小塩 真司, 阿部 晋吾, Cutrone P. 2012 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み, *パーソナリティ研究*, 21, 40-52.
- Palmer, S.E., Schloss, K.B. 2010 An ecological valence theory of human color preference. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 107, 8877-8882.
- Saito, T. 1983 Latent spaces of color preference with and without a context: using the shape of an automobile as a context. *Color Research and Application*, 8, 101-113.

注記

注1 今回の調査においては、被服色として頻繁に用いられる無彩色(白, 灰色, 黒)を選択対象として含まなかった。無彩色が着装色や被服嗜好色の選択候補色として挙げられている場合には、その選択が無彩色に極端に偏ることが想定されるので、それを避けるための対応である。その他の選択色に関しては、バーリンとケイ(1969)の基本色彩11色を参考に、そこから無彩色(白, 灰色, 灰色)を除外し、日本人において特に想起率の高い色である黄緑を加えた。